

之藥送二種者、件清大德仰高田牧司歲規朝臣、以隼船令勞送也。又仰宗像大宮司妙忠、聊令加勞。

〔平家物語〕醫師もんだうの事

同じき三○治承夏の比、小松の大臣○平は、略其比くまの參詣の事有けり、○中其後大臣下向の時、いくばくの日數をへすして、病つき給ひぬ、ごんげんすでに御なうじゆ有にこそとてりやうぢをもし給はず、ましてきたうをもいたされず、其比そうてうよりすぐれたる名いわたつて、本朝にやすらふ事有けり、折ふし入道相國○重盛は、父清盛は、ふくはらの別げうにおはしけるが、越中のせんじ盛俊を去しやにて、小松殿への給ひつかはされけるは、去らういよく、大事なるよし、其聞え有、かねては又そうてうよりすぐれたる名いわたれり、折ふし是を悦びとす、よつてかれを召去やうじて、いりやうをくはへしめ給へとの給ひつかはされたりければ、大臣たすけおこされ、もりとしを御前へめしてたい面有、先いりやうの事畏て承はり候ひぬと申べし、たゞしなんちもよく承はれ、えんぎの御門は、さばかりの賢王にて渡らせ給ひしかども、いこくのさう人を都の中へ入られたりし事を、末代までも、げんわうの御あやまり、本朝のはちとこそ見えたれ、いはんや重盛程のぼん人が、いこくのいしを王城へ入ん事、まつたく國のはちにあらずや、○中たとひ重盛命はばうすといふ共、いかでか國のはちを思ふ心を存せざらん、此よしを申せとこそ給ひけれ。

〔滿濟准后日記〕永享六年六月九日、日野中納言、唐人醫師參上ニテ、令祇候、御脈様可申入、歸參時、可被披露云々、仍猶逗留了、

管領來入唐人醫師召具云々、仍對面了、先管領ニ對謁、次醫師并通士一人管領引導了、予對謁、唐醫單衣體也、唐醫暫休息、無左右不取脈、乘馬之間、如此云々、次取脈、卓ノ上ニヤハラカナル物ヲ可敷云々、仍可然用意、其後左手ヲヤハラカナル物ノ上ニ居テ、醫師、手ヲバ卓ノ上ニ居テ、